

氏名	濱川 祐紀代		
学位の種類	博士（学術）		
学位記番号	博文化甲第24号		
学位授与年月日	平成28年9月23日		
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当		
学位論文題目	漢字教育の実践と学習の方法論 —長期記憶によるつながりを踏まえて—		
論文審査委員	委員長	教授	仁科 弘之
	委員	教授	武井 和人
	委員	教授	杉浦 晋
	委員	准教授	川野 靖子
	委員	名誉教授	小出 慶一

論文の内容の要旨

漢字は語の一部をなし、その語構成に主要な貢献をする。このような日本語を外国語として教える非漢字系の日本語教師にとって、漢字教育は日本語教育における重要でかつ厄介な課題である。濱川氏（以下、著者）の博士論文（以下、本論文）は、教える側の教師の意識と教わる側の学生の意識との交流の中で捉えた漢字像への分析である。本論文は、特に非漢字系若手非母語話者教師（非漢字系若手 NNT: Non-native Teacher）の日本語学習の実態を調査し、学習した漢字がどのように記憶に準備されているのかを漢字放出法でさぐった。さらに、漢字指導において、これらを踏まえた実践がどのようなものになるのかについて、著者の試みを報告しシラバスを示した。

第1章：論文概要

この論文の概要を述べた。

第2章：世界の漢字教育

海外の日本語教育現場の漢字教育の実態を概観した。日本語教育分野では、日本語学習者にとって漢字は難しいという定説がある。国内外を問わず、漢字習得における困難点についての論考がなされてきた。日本語教育の現場では、学習者から、「多数の漢字があり学習が阻まれる」、「複数の読み方があるので困惑する」、「学習方法がわからない」等といった訴えを受けることが多い。そこで、世界12か国15機関の非漢字学習者に調査すると、漢字指導時には、筆順を教え、音読みと訓読みを同時に教え、さらに教科書等を使った読み書き練習をさせていることがわかった。学習法は教師が黒板に書いた情報をノートに書き写すという方法であった。

第3章：学習者が漢字教育に求めること

このような授業における教師の役割は何か。そもそも漢字は独習を前提にする教育現場も多いが、独習で漢字力が身につくのであれば、漢字学習に教師の役割は何か。学習者は教師に期待することがあるのか。本章では、これを調べるため上級レベルの留学生に教師への期待をインタビューでたずねた。この調査から、「文脈の中で学びたい」、「使い方/使い分けを学びたい」、「見通しをたてて学びたい」、「学習方法の情報がほしい」、「興味ある内容を自分の好む方法で学びたい」等の意見がえられた。漢字学習成功者からのこれらの要望は、著者が現場で耳にしてきたことと重なる。これに鑑みると、一般的な学習者を自律学習可能なレベルに引き上げるために教師が提供すべきことは、漢字学習の方法、漢字語彙知識の整理法、人的リソースの活用方法について体験を通じて学ばせること、漢字力の上達によりえられる長所・利点を理解させること、等である。

第4章：漢字学習への意識（意識調査）

それでは、学習者は漢字学習についてどのような意識を持っているのか。ここでは、対象者を学習者一般ではなく、NNT に絞った。漢字学習そのものにどのようなイメージを持つかをたずねると、プラスイメージ 78.1%対マイナスイメージ 21.9%と良い印象の方に傾いた。しかし、半数以上の非漢字系若手 NNT は、「漢字学習の方法がわからない」、「漢字学習が終わらない気がする」、「漢字が覚えられない」といった難しさを感じており、それでも漢字学習をネガティブに捉えるのではなく、「努力すれば漢字学習は成功し、漢字がわかれば役に立つことが多い」、「パソコンでタイプできても漢字の勉強は必要だ」等のように前向きに捉えていることがわかった。

第5章：漢字学習の方法（ストラテジー）

学習方法がわからないという声が出ていたが、それでは実際どのような学習方法を用いているのか。非漢字系若手 NNT60 名を対象に、英語・インドネシア語・タイ語・ベトナム語・マレー語・ミャンマー語・ロシア語の7か国語で質問紙を用いて調査を行い、漢字学習の方法を尋ねた。調査対象者（60名・全体）が「いつも使う」とした漢字学習ストラテジーは平均 8.1 項目であった。まず、非漢字系若手 NNT が「いつも使う」とした漢字学習ストラテジーは平均 8.1 項目、成績上位グループは平均 9.7 項目、成績下位グループは平均 5.7 項目であり、多くの学習方法を組み合わせながら漢字学習を続けてきたことがわかった。さらに、その学習方法は非常にオーソドックスな方法で、反復的に書き、読むことで知識を積み上げてきており、さらに字形や読みだけでなく多様な観点から学習に取り組んできたことが判明した。また、上位に「漢字がわからない時、

辞書で調べる」「漢字だけでなく、ことば・熟語で覚える」があり、単漢字の読み書きだけでなく、意味・用法に着目した方法を使っていた。

しかしながら、4章でみたように、「覚えても忘れてしまう」、「学習方法がわからない」、「読めても書けない」といった困難点も同時に抱えている。この矛盾はどこにあるのか。そこで、担当する授業の中で回答者に確認すると、アンケート目的等が明確でなかったことから、答えに迷いが生じていた。過去に数回試したことのある学習方法もカウントされていた。そこで、学習方法を確認するために、「漢字を覚えなければならない切迫した場面ではどのような手段で漢字を覚えるか」を記述してもらった。その結果、非漢字系若手 NNT は漢字を覚えなければならない状況になったときには、「何度も書く」、「音訓読みを一緒に覚える」等の方法を用いて勉強し、全体としては読み書きを中心とした学習方法を使うこと、さらに読み書きを中心とした復習を繰り返しているということが判明した。

第6章：記憶された漢字とその特徴

自由放出法という、長期記憶の中に特定の意味範疇ごとにどのような語が格納されているかを調べる一種の連想調査法がある。この調査法を漢字教育に応用した、頭に浮かぶ漢字を次々に記録してもらう漢字の自由放出法もある。この漢字の自由放出法は、これまで、初級中級の漢字学習者への調査が主たるものであった。著者は、少人数ではあるが、この調査をインド・ベトナム・マレーシア人の漢字力の高い教師も含めた非漢字系若手 NNT と母語話者に対して調査した。意味範疇を制限せずに自由に漢字を放出してもらい、その漢字列を構成する連想の種類（形・音・意味・用法）ごとに分類した。結果として次のことがわかった。①漢字力が上がると、表出漢字数が増える。②放出された漢字は数文字でしか意味をなさないが、日本人大学生だと3分間続けて、同一連想の下で漢字を書き続けることができる。③表出漢字は日本語能力試験の3-4級（初級）レベルのもので親密度が高い。非漢字系若手 NNT の場合、理解レベルにもかかわらず、自由に表出できるものは初級レベルにとどまっている。④漢字力のレベル差による違いは、初心者には「連想関係なし」や「意味連想」が多いが、学習が進むと連想の種類に個人差がでてくる。これらの結果について、連想によって放出される文字列は、意味の構成原理の弱いバージョンによって説明できるという仮説を提案し、それを検証し議論した。データが少ないので確定的なことはいえないが、母語者との比較においても矛盾しない。

第7章：漢字学習ストラテジー教育

これまでみてきた漢字教育の諸問題を踏まえて、著者の教育実践を報告しながら分析した。第二言語習得研究における中間言語体系の考え方によると、学習者は常に独自の中間言語体系を構築し続けており、習得が進むにしたがって、その中間言語体系が母語

話者のもつ言語体系に近づいてゆくという。非漢字系若手 NNT の知識が母語話者のような「つながりをもった知識」を目指すとするれば、非漢字系若手 NNT 本人が記憶する形や意味のつながり（体系・構造体）を活かせば、無理なく受け入れられ、拡張していけるのではないだろうか。教育実践の賜であっても、漢字と意味の体系が形成されつつもそのペアができた段階に留まり、そのペアをさらに自力で増やして（産出）してゆくことができないでいる。そこを強化・支援することが教師の役割として重要になってくる。漢字教育（指導）に目を向け、著者がこれまでにしてきた実践（グルーピング・ネットワーク強化を目的とした実践）を報告し、シラバスを提案した。

第8章：おわりに

この論文の各章で扱った話題をまとめた。

【目次】

1. 論文概要
2. 世界の漢字教育
 - 2-1. はじめに
 - 2-2. 国別漢字指導法①
 - 2-2-1. インドネシア
 - 2-2-2. ウクライナ
 - 2-2-3. エジプト
 - 2-2-4. スリランカ（3機関）
 - 2-2-5. マレーシア
 - 2-2-6. メキシコ
 - 2-2-7. 国別漢字指導法①のまとめ
 - 2-3. 国別漢字指導法②
 - 2-3-1. インド
 - 2-3-2. カンボジア
 - 2-3-3. ベトナム
 - 2-3-4. ポーランド
 - 2-3-5. ミャンマー
 - 2-3-6. リトアニア
 - 2-3-7. 国別漢字指導法②のまとめ
 - 2-4. 2章のまとめ
3. 学習者が漢字科目に求めること
 - 3-1. はじめに
 - 3-2. 学部留学生の漢字学習の意識

- 3-3. PAC分析
- 3-4. Aさんの事例
- 3-5. 大学院留学生の漢字学習に関する意識調査
 - PAC分析による事例研究—
- 3-6. はなさんの事例
- 3-7. 漢字を専門とする留学生の「漢字学習」に関する意識
- 3-8. 3章のまとめ
- 4. 漢字学習への意識（意識調査）
 - 4-1. はじめに
 - 4-2. 漢字学習意識に関する調査の質問紙項目
 - 4-3. 日本語非母語話者教師の漢字学習に関する意識
 - 非漢字系若手教師への質問紙調査より—
 - 4-4. 4章のまとめ
- 5. 漢字学習の方法（ストラテジー）
 - 5-1. はじめに
 - 5-2. 漢字学習方法に関する先行研究
 - 5-3. 漢字学習方法に関する調査の質問紙項目
 - 5-4. 日本語非母語話者教師の使用する漢字学習方法とその特徴
 - 非漢字系若手教師への質問紙調査からわかること—
 - 5-5. 覚えなければならない状況下での漢字学習方法
 - 5-6. 5章のまとめ
- 6. 記憶された漢字とその特徴（自由放出法）
 - 6-1. はじめに
 - 6-2. 自由放出法とは（定義）
 - 6-3. 日本語教育における自由放出法を用いた先行研究
 - 6-4. 自由放出法の調査概要と分析観点
 - 6-4-1. 調査概要
 - 6-4-2. 分析観点
 - 6-4-3. 分析方針
 - 6-5. インドネシア人日本語教師の漢字表出の傾向
 - 6-5-1. 調査協力者
 - 6-5-2. 自由放出法の結果
 - 6-5-2-1. IDN-A氏の結果
 - 6-5-2-2. IDN-B氏の結果
 - 6-5-2-3. IDN-C氏の結果
 - 6-5-2-4. まとめ

- 6-5-3. 先行研究との相違
- 6-5-4. おわりに
- 6-6. タイ人日本語教師の漢字表出の傾向
 - 6-6-1. 調査協力者
 - 6-6-2. 自由放出法の結果
 - 6-6-2-1. THA-A 氏の結果
 - 6-6-2-2. THA-B 氏の結果
 - 6-6-2-3. THA-C 氏の結果
 - 6-6-2-4. まとめ
 - 6-6-3. おわりに
- 6-7. インド・ベトナム・マレーシア人日本語教師の漢字表出の傾向
 - 6-7-1. 調査協力者
 - 6-7-2. 自由放出法の結果
 - 6-7-2-1. インド人教師の結果
 - 6-7-2-2. ベトナム人教師の結果
 - 6-7-2-3. マレーシア人教師の結果
 - 6-7-2-4. 3か国のまとめ
 - 6-7-3. おわりに
- 6-8. 日本人大学生の漢字表出の傾向
 - 6-8-1. 調査協力者
 - 6-8-2. 調査方法
 - 6-8-3. 自由放出法の結果
- 6-9. まとめ：非漢字系若手 NNT の放出漢字の特徴と考察
- 6-10. 漢字による自由放出法と構成的意味論による考察
 - 6-10-1. 自由放出法の結果の確認
 - 6-10-2. 文意味の構成性
 - 6-10-2-1. 統語構造に基づく文意味
 - 6-10-2-2. 放出された漢字列の意味論的構成性
 - 6-10-2-3. 漢字の部分的形態素性
 - 6-10-2-4. 非母語話者の放出漢字例
 - 6-10-2-5. 母語話者の放出漢字例
 - 6-10-3. 構成性原理を応用した考察
- 7. 漢字学習ストラテジー教育
 - 7-1. 本研究の漢字教育への応用
 - 7-2. 漢字学習ストラテジー教育
 - 7-3. 漢字学習ストラテジー教育の実践報告

7-3-1. シラバス・授業内容

7-3-2. 項目・活動の流れ

7-3-3. 反応と満足度

7-3-4. 実践報告のまとめ

7-4. 長期記憶によるつながりをふまえた実践にむけて

8. おわりに

参考文献

巻末資料

謝辞

論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を2016年8月5日(金)に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。

本論文における特徴的な研究上の方法、結論付けられた新たな知見・見解、また研究現況に与えると考えられるインパクト等を挙げる。

- 1) 本論文では、日本語文内での漢字の使用法を非漢字圏の外国人に教えるために筆者が実践してきた創意工夫が冷静に分析・評価されており、今後の日本語教育方法論の一層の改善に寄与する。
- 2) 自由放出法の漢字教育への応用例の中で、本論文で提案された構成的意味論を仮定したデータへの評価法は、出力(放出結果)が分散した個々の漢字(の意味概念)から有意味な漢字列(句あるいは擬似的な句)としての順序を整えようとする過程を示す、コミュニケーション発生理由への解釈論となっている。
- 3) 東南アジア・中東・欧州等の国々における日本語教育の実践例が俯瞰され、世界的視点で日本語教育を見つめている。今後の教育政策にも貢献可能である。
- 4) アンケートを行う中で、これまで様々な言語で個別に試みられてきた評価法が、本論文で新たな言語に適用され、それによって方法論の検証例を増やしている。
- 5) 著者の永年にわたる日本語教育経験に裏打ちされた貴重なデータ集の側面ももつ。

本論文の研究姿勢、およびもたらされた結論は、上述の如く高く評価されるべきものであるが、しかし、なお検討されるべき問題、論証の徹底、等が存することも事実である。発表会で委員から出た意見等をまとめると、以下のようになる。

- 1) に多様性があるがゆえに比較する際の標本数が揃っていない。調査の性格から困難ではあるが、データを揃えるべきではないか。
- 2) 自由放出法自体の不安定ではないか。
- 3) 教育方法論であるため、自己実践、過去の知見、自己の意見が混在する箇所がみられた。

本論文には、上記の問題点もあるが、論文総体としては、今後、当該研究領域において、大きなインパクトを与える業績として認知されるであろうことが予想される。

以上のことから、本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものと判定した。